

「中1ギャップ」を解消するための「中学校1年生支援」の在り方

教職研修課 長期研修員 鈴木佳代子

1 主題設定の理由

子供たちを取り巻く社会環境や生活様式の急激な変化は、子供たちの心や体の発達に大きな影響を及ぼしている。ゆとりのない生活から生じるストレス、自立の遅れ、コミュニケーション不足などによる気力や意欲の低下、集中力の欠如、自己抑制力やモラルの低下など精神面に多くの悪影響を及ぼしている。

文部科学省の調査データでは、不登校やいじめ、暴力行為などの発生件数が小学6年生より中学1年生の方が著しく増加している。

静岡県教育委員会の平成15年度の「小・中学生の意識調査」においても「学校が楽しくない」「授業の内容がよく分からない」という中学生が、小学生に比べて多いことが明らかになっている。

子供から大人へと心身の変化が訪れ、精神的に不安定になりがちな中学生にとって、集団生活が基本となっている中学校は決して居心地のよい場所とは限らないと考えられる。最上級生としての自覚をもって学校生活を送ってきた小学6年生が、生活環境や学習環境の違う、ゆとりがないと感じる中学校へ進むことは大きなストレスであり、戸惑いを感じることが多いと推測できる。

生き生きとした表情で入学してきた中学1年生が、1学期が終わるころから少しずつ元気がなくなり、疲れた表情の生徒が目立ってくることを、学級担任として何回か実感してきた。原因としては、友達や上級生とのトラブル、集団活動への不適応、部活動や塾が忙しい、授業についていけないなどであった。また2学期半ばを過ぎるころから、学習意欲のない生徒や不登校生徒、いじめ、問題行動を起こす生徒が増えてくる。その都度、個別に補習をしたりトラブルや問題行動に対応したりしてきたが、中学1年生には、教師側の指導や支援がうまく浸透していかないことが多いのが現状である。中学校生活のスタートである中学1年生が安心して学校生活を送るためには、どのような支援をしていけばよいのか、今こそ考えていく必要があると感じ、本主題を設定した。

2 研究の目的

小学校から中学校という環境の変化に伴って様々な悩みや問題を抱え始めている中学1年生の支援に焦点を絞り、県内外で実施している施策の現状を把握した上で学校における具体的な支援策を探る。

3 研究の方法

(1) 調査対象校

H市内の同じ学区	小学校10校	(小学6年生828人	小学6年生担当教師31人)
	中学校5校	(中学1年生872人	中学1年生担当教師36人)

(2) 内容

- ア 県内で実施されている中学校 1 年生支援の35人学級や小・中連携型基礎学力定着プロジェクト事業、小学校での教科担任制などの施策の効果や課題を調査する。
- イ N県で実施されている「中1ギャップ解消調査研究事業」の効果や課題を調査する。
- ウ 小学6年生が、中学校生活にもつ期待や不安と実際の中学1年生の意識の違いを明らかにする。
- エ 教師が見た児童生徒と実際の児童生徒の意識との違いを明らかにする。
- オ アンケート結果や聞き取り調査から出てきた課題からギャップの主な原因を模索し、解消するための効果的な手だてを提案する。

4 研究内容

(1) 中1ギャップとは

ア 中1ギャップとは

中1ギャップとは「中学校入学に伴う学習環境や生活環境の変化によって生ずる様々な課題」と静岡県教育委員会では、定義している。

今、所属している環境から異なる環境に変わっていくことを「環境移行」と言う。学校生活を生活面、人間関係、学習面の3つに分け、中学校生活と小学校生活を比較してみると様々な変化が考えられる。そして、心身の発達（思春期への移行）も同時に並行して進むため、小学校から中学校への環境移行は、生徒たちにより大きな期待をもたせたり不安を抱かせたりすると考えられる。

心身の発達では、身体の急激な成長に伴い、自分がどのように変わっていくのかわからず不安になったり、成長に個人差があるため周囲の人たちの反応がとても気になったりするのが一般的な特徴である。また、心の変化では、第二反抗期に入るため周りからの強制や干渉を嫌がる。その反面、自分に自信がもてず不安になり、無意識に反抗したりイライラしていることが多いのが特徴である。

生徒自らが環境の変化に順応していくことができれば、健全な心身の発達を促すと思う。しかし、環境の変化に順応できないと、学校生活にストレスを感じ様々な問題行動を起こすと考えられる。

イ 環境の変化によるストレスや問題行動

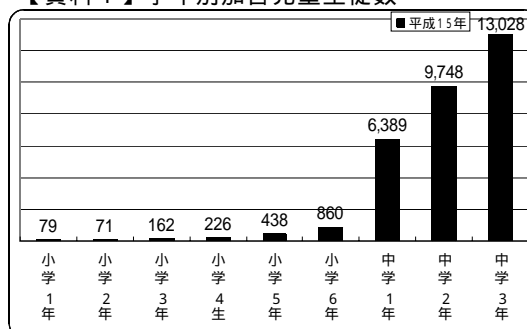
「生徒指導上の諸問題の現状について」(平成16年文部科学省報道発表)によれば以下のことが分かる。

暴力行為は、対教師暴力、生徒間暴力、対人暴力、器物破損の四形態に分類している。小学6年生から中学1年生で、7.4倍に増加している【資料1】。

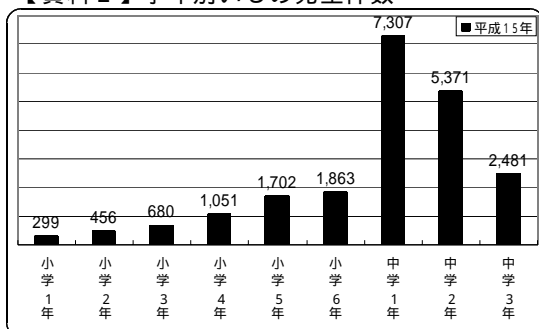
いじめ行為は、自分より弱い者に対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものを示している。小学6年生から中学1年生で3.9倍に増加している。学年別では、中学1年生が最も多く、小・中学生の全発件数の34.5%を占めている【資料2】。

不登校は、心理的、情緒的、身体的、社会的要因で、30日以上欠席した児童生徒を示している。不登校児童生徒数は、小学6年生から中学1年生で2.8倍に増加している【資料3】。小学生は本人の問題に起因するものが最も多いが、中学生は学校生活の問題に起因するものが最も多い。

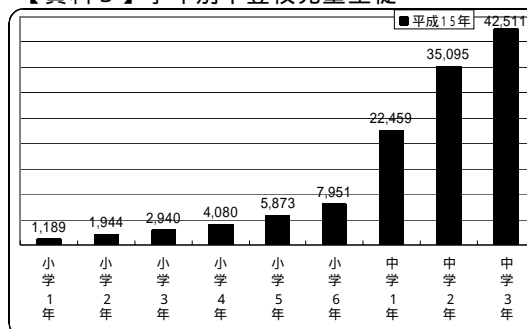
【資料1】学年別加害児童生徒数



【資料2】学年別いじめ発生件数



【資料3】学年別不登校児童生徒



(2) 県内外で行われている取組とその成果、効果と課題（実施校での聞き取り調査）

ア 県やH市の取組

取組	内容	成果や効果	課題
35人学級編制 (H 市立 T 中学校) (H 市立 M 中学校) (H 市立 I 中学校)	中学1年生が対象、1学年3学級以上1学級の学校に適用(県内対象校106校中97校実施)	<ul style="list-style-type: none"> きめ細かな指導ができる。 学習に集中できる。 生徒の聴く態度がよくなる。 生活指導が徹底できる。 教室内の空間的ゆとりが生徒の気持ちのゆとりにつながる。 学級担任の事務的負担が軽減する。 	<ul style="list-style-type: none"> 2、3年生に継続できる体制が必要である。(I 市では平成17年度から全学年実施予定)
小・中連携型基礎学力定着プロジェクト事業 (H 市立 I 中学校) (Y 町立 Y 中学校)	生徒指導、学習指導、交流の3部会に分かれて連携	<ul style="list-style-type: none"> I 中学校では、学習内容の不安や不満が20% (H 市内5校の平均34%) である。 児童生徒の学習意欲が高まる。 系統的な学習は、学習のつまずき解消に効果がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の実態に合わせどんな連携が必要なのか見極めて指導計画を立てることが必要である。 合同研修に時間的な余裕がなく、負担が大きい。
小・中学校教師の人事の交流 (H 市立 T 小学校から T 中学校)	小学6年生から中学3年生までを学級担任	<ul style="list-style-type: none"> 教師の交流によって得られた生徒の情報を生かし、生徒指導を進めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 小・中学校の生徒指導の取組に差がある。 小・中学校の情報交換がより必要である。
出前授業 (H 市立 T 中学校と H 小学校)	中学校の英語教師が小学校で授業	<ul style="list-style-type: none"> 英語に興味関心をもたせながら中学校の英語授業への不安を緩和させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 系統的なカリキュラムの中での連携、指導が必要である。

小・中学校兼務 (H 市立 M 小学校と T 中学校)	小・中学校 教師の授業 交流 (音楽、国語)	・卒業生や入学前の児童生徒 の実態が把握できる。 ・学習内容が小・中学校を通 して系統的に指導できる。	・授業のみの交流なので信 頼関係を築くことが難しい。 ・発達段階に合わせた指導 方法が難しい。(中学校教師)
中学校区合同 研修会 (H 市内中学校)	夏休みに生 徒指導や学 習、進路指 導について 研修	・生徒指導や教科の情報交換の 研修交流の場として有意義で ある。 ・分科会での事例発表は参考 になる。	・研修する時間の確保が難 しいが、必要に応じて定 期的に交流ができるとよ い。
教科担任制 (小学4年生から) (H 市内小学校)	担任間にお いて、教科を 交換しながら 授業を実施 *学校の規模 により取組の 方法が違う	・教材研究ができる。 ・複数の教師で児童を理解す ることができる。 ・児童は、専門的に、楽しく 学ぶことができる。 ・中学校の教科担任制に児童 たちの不安がなくなる。	・発展学習の内容は小学校間 で情報交換の必要がある。 ・少人数指導と両方は難しい。 ・小規模校は、一人の教師が 複数の教科を担当しなければ ならない。 ・時間割編成の工夫が必要 である。

イ N 県の取組 「中1ギャップ解消調査研究事業(モデル校 Z 中学校)」

取 組	成 果 や 効 果	課 題
複数担任制 (2 人担任制)	・生徒間の人間関係の把握が的確にできる。 ・教師が適切な形で生徒指導やトラブルに 介入できる。 ・事務的な仕事は、二人で協働できる。 ・教師も精神面で指導が楽になる。	・2 年生で 1 人担任制に戻 る時、生徒が戸惑う心配 がある。 ・日々の観察や定期的な調 査結果のまとめなど教師 の負担は軽減されてない。
内省ノート (こころのメモ)	・書くことにより生徒のストレスが軽減す る。 ・生徒個人の内面の実態把握ができ、問題 点にすぐ対応できる。 ・教師と生徒の信頼関係を築くことができ る。	・教師のコメント書きの負 担が大きい。(教師がい いかげんになると、生徒 もいかげんになる)
個人カルテ (G メモ)	・ネットワーク上で記入するので、いつで も、誰でも記入や閲覧ができる。 ・必要に応じて情報の整理や分類ができるため、 生徒の個人情報把握するのに効果があ る。	
アンケート ・ Q - U ・ G チェック ・ 健康チェック	・ Q - U(生活アンケート)を年 2 回行い学 級経営、個々の実態把握に役立てること ができる。 ・学習面と部活面のアンケート(G チェッ ク)、心の健康チェックを毎月行うこと で、人間関係や心の状態、生活態度など 継続的に把握することができる。	・データを入力する仕事 が増える。
中1ギャップ 解消検討会議	・モデル校 5 校と有識者、県教委が定期的 に検討会を開き、生徒の生活実態から中 1ギャップの要因を探り、対応策が検討 できる。	・共通の実態調査を行うよ うにする。

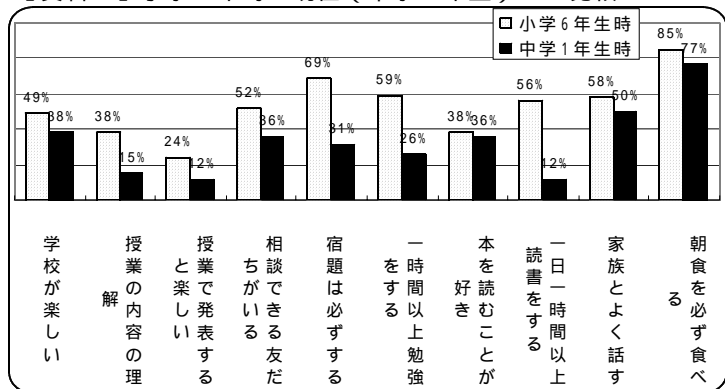
(3) 小学6年生と中学1年生の意識の違い(アンケートから)

ア 静岡県教育委員会 小・中学生の意識調査(平成15年度、平成16年度)

【資料4】から学習面や人間関係に意識の変化があることが分かる。

同一人物の調査なので本人の好みや家庭環境は変わらない。そのため、
、の項目の意識は、あまり変化がない。

【資料4】小学6年時と現在(中学1年生)との比較

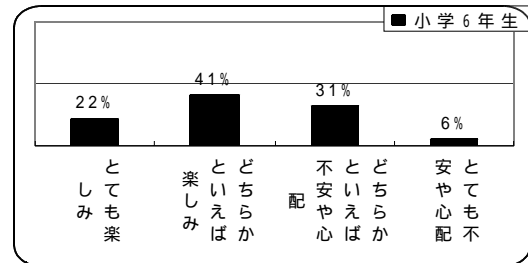


イ H市内の小中学校10校、中学校5校の児童生徒の実態から(平成16年度)

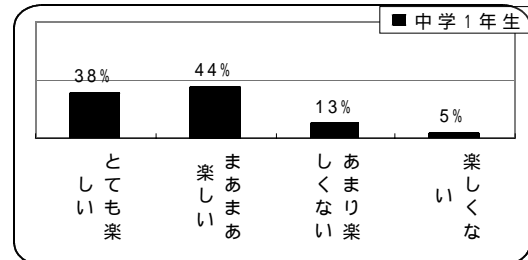
(7) 中学校生活への期待(小学6年生と中学1年生の感じ方の違い)

【資料5】から63%の小学6年生が中学校生活に期待をしている。【資料7】から小学6年生は、中学校の生活を新たな自分へのスタートととらえ期待に胸を膨らましていると考えられる。特に、違う小学校の新しい友達との出会い、小学校の時より盛んな部活動への参加、大々的に行われる体育大会や文化発表会などの学校行事、制服を着ることなどに期待をしていることが分かる。【資料5】で新しい生活になじめるのかと不安を抱いている37%の小学6年生の中にも【資料7】の回答を見ると、新しい友達との出会いや部活動などを楽しみにしている小学6年生がいることが明らかになっている。

【資料5】中学校へ入学することをどう感じているか

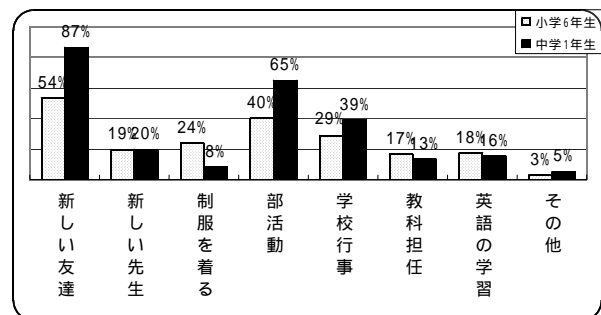


【資料6】中学校生活をどう感じているか



【資料6】から実際82%の中学1年生は、楽しく学校生活を送っていることが分かる。【資料7】から中学1年生も新しい友達との

【資料7】中学校生活で楽しみにしていること、実際に楽しいこと



かかわりや部活動、学校行事を小学6年生が楽しみにしている以上に楽しいと感じていることが分かる。また、その他の項目で総合的な学習の時間や各教科で専門的に学べることを楽しいと感じている生徒もいる。

(1) 中学校生活への不安や不満（小学6年生と中学1年生の感じ方の違い）

82%の中学1年生が楽しく学校生活を送っているにもかかわらず、【資料8】から58%の中学1年生が中学校生活に不安や不満をもっていることが分かった。また、【資料5】から37%の小学6年生が中学校生活に不安をもっていることから、学校生活を生活面、人間関係、学習面に分けどんな項目に不安や不満をもっているのか調査した。

・生活面での不安や不満 【資料9】

小学6年生は学校のきまり、給食、休み時間に特に不安を感じている。きまりが増えること、給食の時間が短くなり量が増えること、業間の休み時間がなくなること、昼休みの時間が短くなることに不安を感じていると考えられる。

実際の中学1年生では、学校のきまり以外は不安や不満を感じている生徒は少ない。

・人間関係での不安や不満 【資料10】

小学6年生、中学1年生とも上級生に不安や不満を多く感じている。

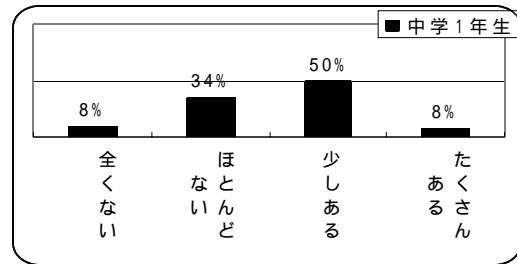
小学6年生は急に大人っぽくなった上級生の様子に、中学1年生は部活動での上下の人間関係の難しさやわずらわしさに不安や不満をもっていると考えられる。

またH市は、教科担任制を小学校の高学年から実施しているため、教科担任制には抵抗感がないと考えられる。

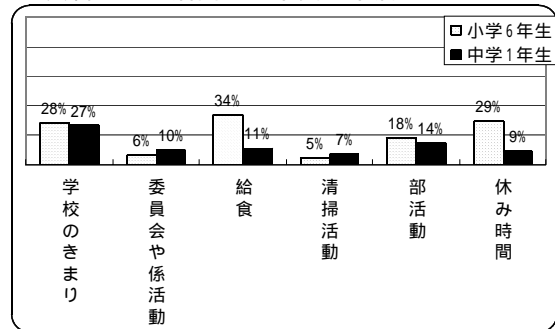
・学習面での不安や不満 【資料11】

生活面や人間関係に比べて、学習面での不安や不満をもつ児童生徒が多い。特に、授業に関する事(学習内容の難しさ、授業進度)や苦手教科があることに不安や不満を感じている中学1年生が多い。部活動などで時間に余裕がなく、学習時間が少ないことや各教科の学習方法が分からず、苦手教科の克服が今ひとつできずに悩ん

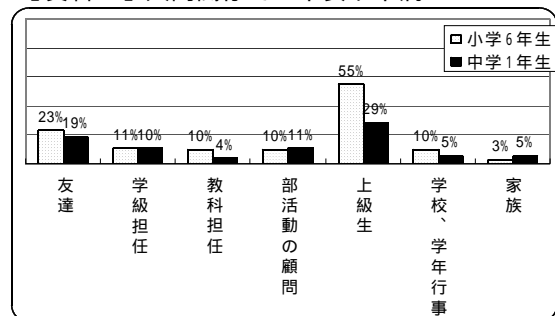
【資料8】中学校生活に不安や不満があるか



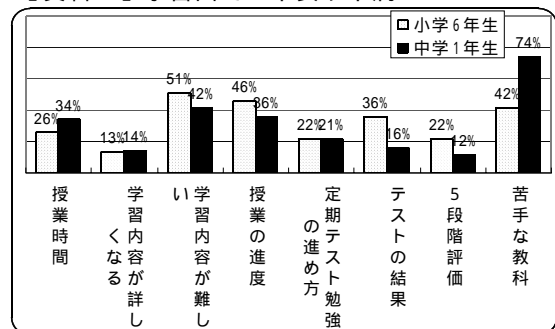
【資料9】生活面での不安や不満



【資料10】人間関係での不安や不満



【資料11】学習面での不安や不満



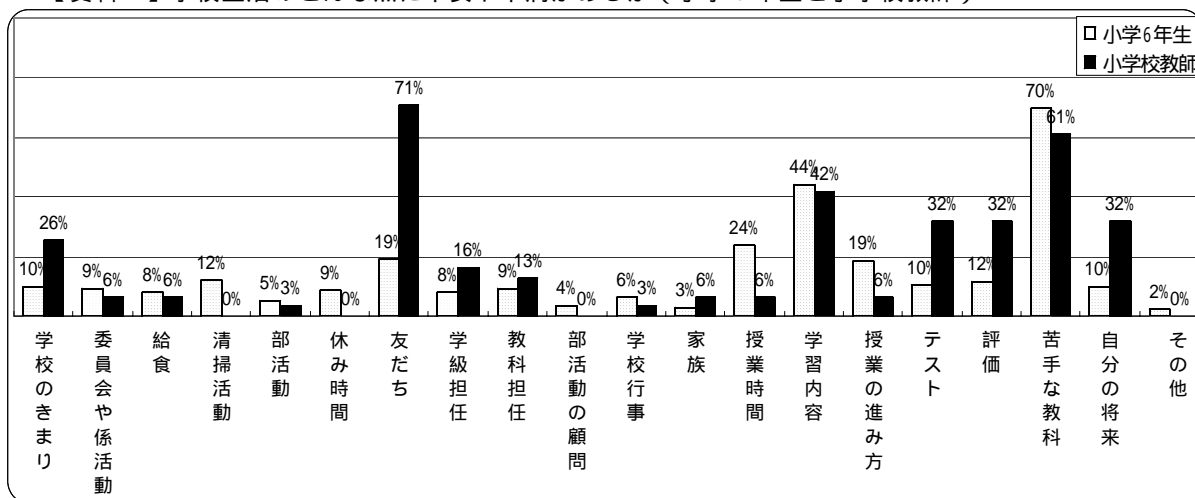
でいる中学1年生が多いのではないかと考える。

その他、テスト結果が出ることや成績が5段階で評定されることは、小学校では経験がないため小学6年生は不安をもっている。中学校では学級活動や学年懇談会などで説明されるため、中学1年生は予想していたほど不安や不満はもっていないと考えられる。

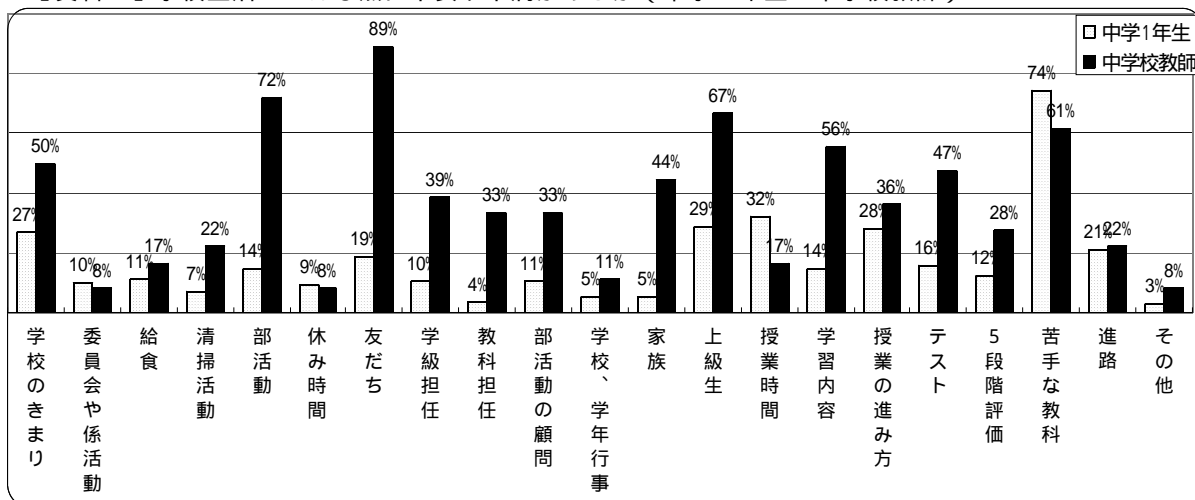
(4) 教師と児童生徒、小学校教師と中学校教師との意識の違い

学校生活での不安や不満について小学6年生と中学1年生に尋ねた。また、教師には、「児童生徒は学校生活のどんな点に不安や不満があると思うか」を尋ねた。なお、回答は複数回答とした。

【資料12】学校生活のどんな点に不安や不満があるか（小学6年生と小学校教師）



【資料13】学校生活のどんな点に不安や不満があるか（中学1年生と中学校教師）

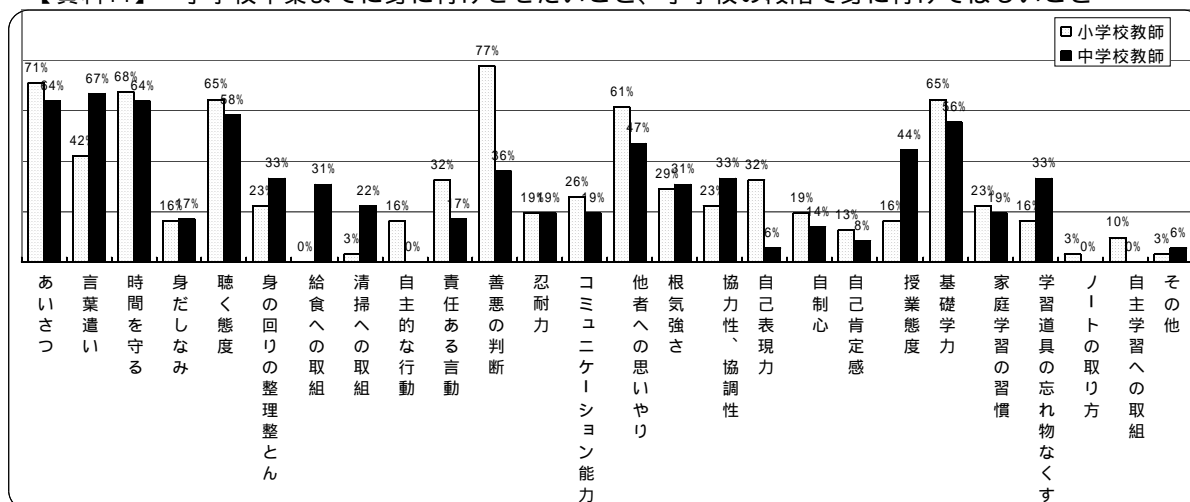


小・中学校教師が心配しているほど児童生徒は学校生活に不安や不満をもっていないことが【資料12】【資料13】から分かる。

ただし中学校においては、【資料13】から生徒が不安や不満に感じていることと教師が生徒に心配していることは、ずれがあることが分かる。

生徒は、学習面に多く不安や不満をもっている。一方、教師は友達や上級生、家族、教師とのかかわりなどの人間関係の面や部活動への取組について心配をしている。

【資料14】 小学校卒業までに身に付けさせたいこと、小学校の段階で身に付けてほしいこと



小学校教師は児童の自主的な行動や善悪の判断、自己表現力、自己肯定感など児童に自立性を身に付けさせることに重点を置いている。

中学校教師は言葉づかいや給食マナー、清掃への取組などを含めた基本的な生活習慣や授業を受ける規律、学習道具の忘れ物をしないなど学習の基本姿勢を小学校の段階で身に付けてほしいと希望している。

小・中学校とも児童生徒への指導内容は変わらないと思う。しかし小学校教師が児童に小学校卒業までに身に付けさせたいことと中学校教師が中学校入学までに生徒に身に付けてほしいこととは、必ずしも一致していない。

以上のことから、中学1年生の支援の在り方を考えるとき、次の2点には留意すべきと考える。

- ・中学校の教師は、生徒の意識とにある種のずれがあることを自覚し、生徒理解を一層進める必要がある。
- ・小学校の教師と中学校の教師では、児童生徒に対する指導の姿勢に違いがあることを踏まえ、生徒の実態に応じた指導をする必要がある。

(5) 中学1年生に対する支援の在り方の一方策

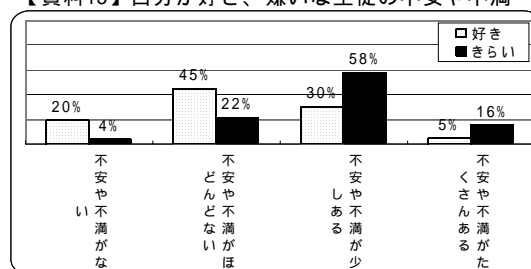
ア 生徒理解の必要性

生徒たちが起こす問題行動は、目に見え聞こえる言動ばかりではない。そのことを教師がしっかりと理解し、生徒の言動の背景を探ることが重要になる。

【資料15】から自分のことが嫌いな生徒ほど学校生活に不安や不満が多い

ことが分かる。生徒は教師から受容されることで、自分のよい面や悪い面を理解し、ありのままの自分を受け入れることができる。そして、不安や不満などの問題を自らの力で解決しようとする能力を身に付けていくことができると考える。したがって自己肯定感をもちたせることは大切であると考え。

【資料15】自分が好き、嫌いな生徒の不安や不満



イ 生徒理解の方法

(ア) 共感的生徒理解（日記、作文、面談など）

教師が生徒の立場になって生徒を理解することである。生徒一人一人の考え方や感じ方を理解できるが、ややもすると生徒のペースに巻き込まれたり、教師自身が主観的になるので気を付けなければならない。

(イ) 客観的生徒理解（観察、検査、調査など）

教師が生徒との間に心理的な距離を置き、冷静に、多方面から、公平な目で生徒を理解することである。データを利用して客観的に生徒を理解することが大切である。しかし、検査や調査で得たデータが、生徒の実態すべてではない。

ウ 具体的な手だて

(ア) 個人カルテ（記入しやすく、使いやすく、管理しやすく）

N県の「個人カルテ（Gメモ）」を参考に【資料16】の「個人カルテ」を作成し、T中学校1年生で実施した。特に工夫した点は、生徒指導要録の補助簿になるように項目をそろえたこと、生徒の表れの中で積極的によい面を記入することである。

【資料16】 個人カルテ（T中学校1年生で実施）

1	A	B	C	D	E	F	G	H
1	月日	曜日	生徒名	記載種	項目	時間	生徒の表れ	指導内容
2	12月8日	水曜日	A	i	生活	朝読書	朝読書に集中できない。	興味のある本を開き、集中して取り組もうよう指導した。
3	12月10日	金曜日	B	i	学級活動	放課後	ボランティアで教室のワックス塗りに取り組んだ。	
4	12月10日	金曜日	C	m	学級活動	放課後	ボランティアで教室のワックス塗りに進んで取り組んだ。	
5	12月10日	金曜日	D	h	人間関係	給食時	別室登校している友人の給食を毎日のように別室に届けていた。	
6	12月13日	月曜日	E	h	学習係	4校時	朝読書の振り返りの記述を書かせた際、音読みがあまり文章表現を好まないため、用紙に手紙に記入できた。	
7	12月13日	月曜日	B	i	生活	朝	朝早く登校し、ワックスがけのため廊下に出してあった級友の机を熱々と蹴り込んだ。	
8	12月14日	火曜日	F	m	学習係	5校時	保健体育で教師の話が聞けなかった。	教師が話している際に、友人宛の手紙を書きつけて注意する。
9	12月15日	水曜日	G	i	生活	放課後	部活動を無断で休んだ。A、Hと下校後H中に出席。	H中の教員に指導を受ける。部活動顧問から指導を受けた。
10	12月16日	木曜日	H	h	生活	登校時	この日部活動が休んでいた。	もう少し早く登校するよう指導する。
11	12月16日	木曜日	A	h	生活	放課後	提出物を廊下に来た際、職員室でいじわるな言葉で対応された。	級友や教師に乱暴な言葉を発したため言葉遣い注意した。
12	12月17日	金曜日	J	h	生活	放課後	朝から体調が悪い。	
13	12月20日	月曜日	K	i	学習技術	4校時	技術の授業で制作に大変集中して取り組んだ。	
14	12月20日	月曜日	B	i	生活	給食	いつも楽しそうにしゃべりながら給食を食べるが、口数も少なく遅いようだった。	学級担任が一語に給食を食べながら元気づけた。部活動のことが原因だったので部活動顧問にも相談する。
15	12月21日	火曜日	C	i	学習理科	3校時	理科の授業で実験に集中できなかった。	実験中、私語が多く危険であったので注意する。
16	12月21日	火曜日	I	h	生活	給食時	くまのワックスを履いていた。	それを履きとめを履いたため指導した。

成果と課題

データを職員室のサーバーに保管し、常に全職員が同時に自分のパソコンで閲覧ができ、情報が共有できる。（H市は教師全員にパソコンが支給されている）成績処理や生徒指導要録の所見に内容が活用できる。
個人別や項目ごと、時間ごとなど必要に応じて分類し、定期的（学年会や生徒指導委員会、職員会など）に記載された内容を確認し、指導に生かせる。
情報のセキュリティシステムが必要である。（パスワード、管理体制など）

(ウ) 生活意識アンケート

生徒の意識の変化を把握するため

【資料19】の「生活意識アンケート」を、学期の中間にあたる6月、10月、2月の計3回行う。

T中学校で6月と10月に実施したところ次のような効果が確認できた。

効果

教師は、客観的に、継続的に個々の生徒の実態を把握することができる。
生徒は、自分の変化を冷静に見つめ、分析することができる。

【資料19】 生活意識アンケート

このアンケートは、みなさんが中学校生活をどのように感じているか知るためのものです。あてはまるものをつけてください。

1 現在、あなたは、中学校生活をどう感じていますか。		6月	10月	2月
ア	とても楽しい			
イ	まあまあ楽しい			
ウ	あまり楽しくない			
エ	楽しくない			
ア	不安や不満が全くない			
イ	不安や不満がほとんどない			
ウ	不安や不満が少しある			
エ	不安や不満がたくさんある			

2 あなたは、中学校生活の中でどんな点に不安や不満を感じますか（は、いくつつけてもよい）		6月	10月	2月
ア	学校のきまり			
イ	委員会や係活動			
ウ	給食			
エ	清掃活動			
オ	部活動			
カ	休み時間			
キ	友だち			
ク	学級担任			
ケ	教科担任			
コ	部活動の顧問			
サ	上級生			
シ	学校、学年行事			
ス	家族（親、兄弟姉妹）			
セ	授業時間			
ソ	学習内容			
タ	授業の進め方			
チ	定期テスト勉強の進め方			
ツ	テストの結果			
テ	5段階評価			
ト	苦手な教科	国 理 英 美 保 体	社 英 音 技 家 保 体	国 理 英 音 美 技 家 保 体
ナ	将来のこと 進路			
ニ	身体のこと			
ヌ	その他			

(I) 生活指導年間計画

【資料20】は、T中学校の「生活指導年間計画」に「1年生の予想される実態」「学年経営のポイント」「学級経営のポイント（生活面、人間関係、学習面）」を項目として付け加えたものである。なお、この年間計画表は年度途中で生徒の実態に応じて加除修正をしながら使用する。

【資料20】第1学年 生活指導年間計画（例）

月	学校・学年行事 (1年生)	月 目 標 (生活目標)	1年生の実態	学年経営のポイント	学級経営のポイント		
					生活面	人間関係	学習面
4	入学式 対面式	新学年としての誇りと自覚をもとう	・期待や不安、緊張の中で学校生活がスタートする。何事にも意欲がある	・学年びらき（集団行動、生活） ・共通理解での学級指導	・学級びらき ・特設学活（生活のきまり、学級組織など）	・班編成 ・日記指導	・授業びらき(教科担任) ・個々の学力の実態把握
5	家庭訪問 地域奉仕活動 部活動開始	基本的な生活習慣を身につけよう	・学校生活に慣れてくる。 ・学級内での自分の居場所を探して、地が出てくる。	・各学級の心配な生徒の言動を把握、共通理解	・連休前後指導 ・家庭生活の確認	・二者面談（全員） ・個々の生徒の言動把握	・教科担任との連携 ・家庭学習の確立
6	部活動保護者会 健康週間 定期テスト	健康で安全な生活を見直そう	・梅雨の季節と重なり生活がだれる。人間関係のトラブルが起きやすい。	・落ち着いた生活 ・梅雨時健康指導	・係活動の見直し ・心身の発達に向けて ・学級環境整備	・学級への適応調査 ・日記指導	・学習相談 ・定期テスト対策
7	中体連市内大会 交通教室 終業式	1学期の学校生活を見直そう	・部活動が充実する。 ・時間にゆとりがなく、生活が落ち着かない。	・1学期のまとめ ・学年主任は、各学級の実態を把握し、各月のポイントを提示する。	・1学期のまとめ（成果と課題） ・夏休みの生活指導	・三者面談 ・友人関係を把握	・教科担任との連携 ・夏休みの学習計画
8	中体連県大会 三者面談	規則正しい生活をしよう	・開放的な気分で気がゆるみ生活が乱れる。意欲的に部活動に取り組む。	・本人との連絡 ・保護者との連携	・学級生活の見直し ・学級組織 ・体育大会への取組 ・学級の諸問題 ・係活動の見直し	・班編成 ・指導	・課題への計画的な取組 ・学習相談（苦手教科） ・進路学習(身近な職業)
9	始業式 防災訓練 体育大会	諸活動をねばり強くやり抜こう	・休み明けで生活面や学習面に意欲が見られない。 ・残暑で体調を崩しやすい。	・2学期のまとめ ・冬休みの生活への指導	・学級生活の見直し ・合唱コンクール	・班編成 ・日記指導	・家庭学習の確立 ・進路学習(職業)
10	体力テスト 中体連新人戦 立会い演説会選挙	友だちの立場を尊重し、お互いに助け合おう	・部活動が活発になる。生活面や学習面に意欲が見られる。	・2学期のまとめ ・冬休みの生活への指導	・学級生活の見直し ・合唱コンクール	・班編成 ・日記指導	・家庭学習の確立 ・基礎基本の定着度確認 ・教科担任との連携
11	校内文化週間 合唱コンクール 定期テスト	将来を見据えて、自己の個性・特性を伸ばそう	・かじめ記入し生活指導の予防を行う。	・3学期全体の計画 ・学年委員会の指導 ・共通理解での学級指導	・学級生活の見直し ・合唱コンクール	・班編成 ・日記指導	・家庭学習の確立 ・基礎基本の定着度確認 ・教科担任との連携
12	市定着度調査 三者面談 終業式	二学期の学校生活を見直そう	・時間にゆとりがある生活を送ることができる。	・体験学習への取組指導 ・学年、学級、個人の振り返り	・2学期のまとめ（成果と課題） ・学級生活の見直し ・学級史の取組	・級友とのかわり方 ・学級への適応調査 ・二者面談（全員）	・進路学習(自分の将来) ・学習相談 ・定期テスト対策
1	始業式 興学力診断調査 地域奉仕活動	新しい気持ちを大切にしよう	・時間にゆとりがある生活を送る。	・1年のまとめ（成果と課題） ・春休みの生活への指導	・1年のまとめ （自分史のまとめ） ・2年生への目標	・個々の人間関係を把握（学級編成に向けて） ・三者面談	・
2	スキー体験学習 学年末テスト	健康管理に留意し、一年の学習をまとめよう	・時間にゆとりがある生活を送る。	・	・	・	・
3	文化教室 三者面談 終了式卒業式	学校生活のまとめをし、友だちと学級を思いやろう	・	・	・	・	・

以上の「個人カルテ」「内省ノート」「生活意識アンケート」「生活指導年間計画」は、それぞれで得た情報を補いながら活用していくことにより、更に生徒理解が深まっていくと考える。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

研究に取り組んだ結果から、次の点が明らかになった。

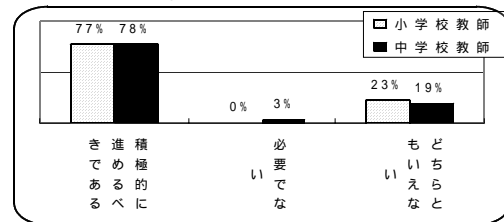
- ・生徒と教師、小学校と中学校の教師の意識の差が大きいことが、中1ギャップの大きな要因と考える。
- ・生徒と教師の意識の差を埋めていくためには、人間関係づくり（信頼関係）が大切である。そのためには定期的、継続的な生徒理解が大切である。
- ・県内で実施されている施策の効果によって、生徒たちは予想していたよりもスムーズに環境移行ができています。（中学校生活に順応している）

(2) 今後の課題

ア 一貫した指導、柔軟性をもった指導（生活指導、学習指導）の必要性

小・中学校の教師とも小・中連携の必要性を感じている。その反面、実際に小・中連携に取り組んでいる学校では、連携方法について更に検討していく必要があると感じている。

【資料21】小中連携について



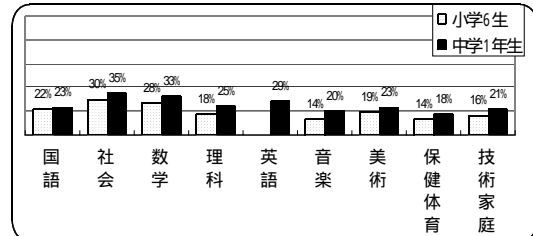
学力面では、小学校は中学校側で指摘する不足している学力に焦点を当てて学習する。中学校は小学校の申し送りなどにより、弱点を把握し、指導計画を立てるなどの工夫が必要である。

生活面では、小・中学校で連携、調整した基本的生活習慣を発達段階にあわせて継続的・計画的に指導していくことが重要であると考えます。

イ 静岡県版カリキュラムの活用

【資料11】から苦手教科のある生徒は全体の74%を示している。そして小学6年生から苦手意識をもっている生徒が多いことが分かる。系統的、体系的なカリキュラムの中で、学習面のつまづきを解消していく教科指導が重要であると考えます。

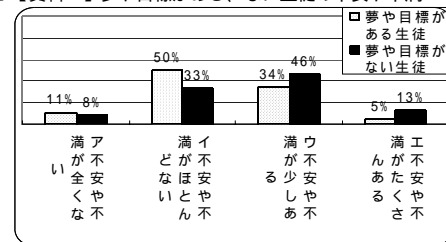
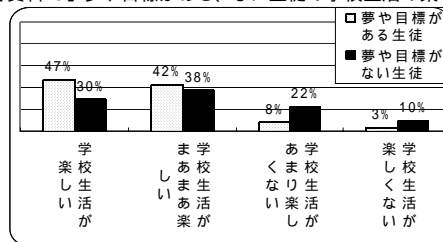
【資料22】苦手な教科（小学6年生と中学1年生）



ウ キャリア教育の推進

将来の夢や目標のある生徒は、ない生徒に比べ学校生活を楽しんでいる。

【資料23】夢や目標がある、ない生徒の学校生活の楽しさ 【資料24】夢や目標がある、ない生徒の不安や不満



不安や不満が少ないことがアンケートから明らかになっている。学校生活のすべてが、生徒自身の将来を見据えた活動であることが大切だと考える。

エ 継続的な生徒の実態把握と支援

今回のアンケート調査は、2学期（10月）に行った。時間がたつにつれ、生徒たちのストレスも大きくなっていくと考える。今後、継続的に生徒の実態を把握し、中学2年生、中学3年生への支援の在り方についても考えていく必要がある。